

## 講習会の評価としての満足度と関連する要因 —EBP，看護研究，研究倫理およびPC操作を統合した講習—

浅沼優子，遠藤良仁，山内一史，伊藤收

### Satisfaction and Related Factors in the Evaluation of a Seminar Program Integrated with Evidence-based Practice, Nursing Research, Research Ethics and PC Skills

Yuko Asanuma, Yoshihito Endo, Kazushi Yamanouchi, Osamu Ito

#### 要 旨

看護職を対象とした，[看護実践とEBP] [看護研究プロセス] [研究倫理] [PC操作] の4つのセッションと受講者の選択による【PC演習】および【看護研究・研究倫理の相談】からなる講習会を実施し受講者による評価を行った。対象は講習会に参加した看護職49名。講習会実施後に質問紙調査を行った。結果および考察は，回収は43，回収率88%。全体的な『満足度』では，概ね満足が得られていた。『満足度』と他の項目との相関では，[看護実践とEBP] [看護研究プロセス] [研究倫理] の『受講後の関心』で有意な正の相関が見られた。全セッションにおいて『受講後の関心』と『期待』で有意な正の相関がみられた。【PC演習】を行った群で [看護実践とEBP] の『受講後の関心』『理解の深まり』が有意に高かった。自主的に参加した群は勧奨による群に比べて [看護実践とEBP] の『受講後の関心』『期待』が有意に高かった。講習会後の自己学習などの動機付けとなる『受講後の関心』を高めるためには，受講者の期待と一致する内容となるような企画の必要性が示された。また，EBPの理解のためには実際にPCを操作する演習が有効であった。

キーワード：EBP，看護研究，研究倫理，講習会プログラム評価

#### はじめに

看護研究に関する研修会・講習会は施設内はもとより，職能団体や学会などでも広く開催されている。これらの研修会等の評価に関しても数多くの研究がされている。学習の効果に関して，ねらいとする知識やスキルがどの程度身についたか，看護や研究の実践がどのように変化しているかなどについて，研修会后，または前後での評価を行い，研修会のプロセスや内容に関し考察を行っている<sup>1)-7)</sup>。

一方，教育学の分野における授業評価では，全体的な評価としての満足度に関連する因子は何か，という観点の研究が広く実施されている。また，そこで評価される因子は，主に教師

側の属性や教授技能である<sup>8)-11)</sup>。

今回我々は，臨床看護職を対象とし，EBP (evidence-based practice) を中心として看護研究および研究倫理を統合する講習会を実施し，事後のアンケートによって評価を行った。今回の講習会の内容の特徴は，これまでは別々に教授されることが多かったEBPと看護研究を一つの流れの中で関連を示したプログラムとした点である。医学中央雑誌で「EBP」「EBN (evidence-based nursing)」「EBM (Evidence-based medicine)」を検索した結果，EBPはEBMとして1998年に看護系雑誌の中で初めて紹介され，同年にはEBNについての解説の記事も掲載されている。2000年12月には

EBNURSING誌(中山書店)が創刊され、看護実践の成果の蓄積が明確なEBNの概念に基づいて示されるようになったが、これ以前、EBNは統計学や疫学との関連で解説されることが多かった。その後今日に至るまでEBNに関する文献は特定のケアに関するエビデンスとベストプラクティスの紹介といった内容の解説がほとんどである。EBNを「文献を探す・読む」ものとして解説している文献は2001年頃から見られ始めているが、2004年7月開催の第30回日本看護研究学会学術集会シンポジウム『EBNを実践する鍵—つくる・さがす・つかう—』<sup>12)</sup>で「これからはエビデンスを「さがす」「つかう」ということをもっと重点化されることがEBNとしての課題である。」と指摘されている通り、EBNイコール科学的かつ統計的に精密な研究を実施すること、というイメージが根強かったと思われる。EBPの理解のためには、あえて看護研究プロセスと同じ講座の中で講義をし、両者の関係を説明することが効果的と考えた。さらに、臨床看護職が困難を感じていると考えられる研究倫理についても看護研究プロセスとは独立した講義と個別相談を設定し、パソコン操作、およびEBPの第2ステップの実践としてインターネットによる文献・情報検索の実際についても演習を行うといったミックスセッションとした。

以上の構想による講習会の概要は表1および次の通りである。講習会のテーマは「EBPに基づく看護研究講習会」であった。午前中は一斉講義形式で4名の講師がそれぞれ【看護実践とEBP】【看護研究プロセス】【研究倫理】【論文作成で役立つPC操作(以下PC操作)】の4つのセッションを行った。午後は参加者の事前の希望により、【PCによるEBP演習、文献検討演習(以下EBP演習コース)】と【相談(看護研究、研究倫理)(以下看護研究・研究倫理コース)】の2つのコースに分かれて開講した。【EBP演習コース】は、1人1台のパソコンを用いた演習形式で実施した。【看護研究・研究倫理コース】は、看護研究と研究倫理で部屋を分かれ、参加者の個別の疑問について講師から解説を受け、あるいは参加者同士で話し合う形式で進めた。参加者の疑問に応じて、看護研究・研究倫理の両方を行き来して相談をすることも可能とした。

その他の特徴としては、看護管理責任者への

表1 EBPに基づく看護研究講習会の概要

セッションおよびテーマ内容の概要	
午前	講義
	看護実践とEBP 60分 看護師に求められている情報能力、EBPの基礎、役立つWebページなど
	看護研究プロセス 45分 臨床看護研究の意義と課題、看護研究のプロセスなど
	研究倫理 30分 看護研究における倫理の考え方と課題など
	論文作成で役立つPC操作 30分 アウトライン機能の使い方など
午後	①PCによるEBP演習 150分 インターネットを用いた文献・情報検索と文献検討
	相談 150分
	②看護研究 看護研究に関する個別相談
	③研究倫理 看護研究倫理に関する個別相談

※午後は①②③から希望で選択

事前の調査に基づき会場や日時を設定した点である。

講習会参加者は、岩手県内の50床以上の医療機関93施設の看護管理責任者に対し案内を送付し、施設内での周知を依頼して募集した。参加申し込みは施設ごとではなく個別に受付、40名の定員で先着順とした。

今回の講習会では、具体的な知識の獲得よりも、むしろ、今後の自己学習や実践・研究への意欲につながることを目指した。従って、各セッションでは、個々のテーマに対する『理解の深まり』、および、能動的に対象に向かう注意や興味である『受講後の関心』が高まることを目標とし、これについての自己評価を学習成果の評価とした。

以上をふまえ、本研究では、これらの評価が講習会全体の総合的な評価としての『満足度』と関連があるか、また『満足度』と関連がある他の評価項目を明らかにし、講習会等において『満足度』を高めることの必要性を確認するとともに、その方法を検討する。

また、今回の講習会が試みとして4つのテーマ、セッションを統合して行っていることの評

価として、各セッション受講後のテーマに対する『受講後の関心』に関連する要因は何かを探ることとする。なお、本研究の概念枠組みを図1に示す。

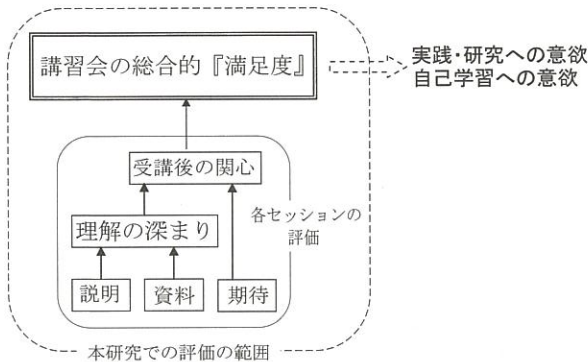


図1 本研究の概念枠組み

## I 方法

### 1) 調査対象

講習会に参加した臨床看護職49名。

### 2) 調査日

平成21年6月19日。

### 3) 調査方法

自作の質問紙による自記式質問紙調査。講習会終了後、全員が集合している講義室において説明と依頼を行った。回収は回収箱を設置して当日中に回収した。

### 4) 調査内容

#### (1) 回答者の背景

基本的な属性として、性別、臨床経験年数、看護の基礎教育について回答を求めた。講習内容に関するレディネスとして、看護研究の経験、EBPに関する学習経験、看護研究に関する学習経験を、また、参加の動機づけに関連して、参加のきっかけ、看護研究に関する役割について回答を求めた。

#### (2) 講習会の総合評価

総合的な満足度（以下、『満足度』）について「1. 非常に不満足」から「7. 大満足」までの7段階、受講前の期待感（以下、『事前の期待』）について「1. 非常に低い」から「7. 非常に高い」までの7段階、期待と内容の一致度（以下、『期待との一致』）について「1. 全く合っていない」から「7. とても合っていた」の7段階

階で、いずれもリッカートスケールで回答を求めた。その他、講習会の内容が実践に活かせるかなどについて自由記述を求めた。

### (3) 各セッションに対する評価

[看護実践とEBP] [看護研究プロセス] [研究倫理] [PC操作] それぞれについて以下の回答を求めた。各セッションの総合的な評価として、講習会終了時点での各テーマに関する関心の高さ（以下、『受講後の関心』）について「1. 非常に関心が低い」から「7. とても関心が高い」の7段階、各テーマへの『理解の深まり』について「1. 全く思わない」から「7. とてもそう思う」の7段階、実際の内容は期待と合っていたか（以下、『期待』）について「1. 期待以下」から「7. 期待以上」の7段階、講師の説明（以下、『説明』）について「1. 非常に難解」から「7. とてもわかりやすい」の7段階、資料（スライド、配布物）の満足度（以下、『資料』）について「1. 非常に不満足」から「7. とても満足」の7段階で、いずれもリッカートスケールで回答を求めた。その他、理解が難しかった用語や意見などについて自由記述を求めた。

### 5) 分析方法

項目ごとの単純集計、項目間の関係の有無についてSpearmanの順位相関係数の算出、Mann-Whitney検定、Fisherの直接確率法を行った。有意水準は5%とし、分析にはSPSS17.0Jを使用した。

### 6) 倫理的配慮

対象者が集合した状況で以下について明記した文書を配布し口頭で説明を行った。①研究の目的・意義、②研究の方法、③研究への参加・協力の自由意志と拒否権、④個人情報保護（匿名性の確保）、⑤研究への参加協力による利益、⑥研究への参加協力による不利益、⑦研究の公表、⑧研究者の連絡先。

同意を得る方法としては、対象者と研究者間で署名済み日付入りの同意書を交わすことで本研究への同意とみなすこととし、研究に協力が得られる場合は、調査票および同意書それぞれを回収箱に入れるように説明した。

匿名性の確保および回答への強制力の排除としては、回答は無記名とし、調査票の投函状況について研究者・講習会講師が感知し得ない場所に回収箱を設置した。また、回収した調査票は鍵のかかる場所に保管した。

なお、本研究は所属大学の研究倫理審査を受け承認（非該当）を得て実施した。

## II 結果

### 1) 対象者の概要（表2）

43名から回答が得られ、回収率は88%であった。性別は女性が40名（93%）、臨床経験年数は4年から32年で平均17.9年、標準偏差8.6年であった。看護に関する基礎教育は全体の81%が専門学校卒業で、大学卒業は4名、短期大学卒業は1名であった。

約8割は看護研究の経験者であった。これまでの学習経験は、看護研究に関しては77%が「経験あり」であったが、一方でEBPに関しては12%、EBPと看護研究の関連に関しては9%と1割程度のみ学習経験であった。回答者の約8割は研究者または看護研究の指導者として看護研究に関わっていた。

なお、サンプル総数が少ないため、回答者の属性に関する項目のうち、度数に比較的偏りがみられなかった参加のきっかけのみ、を「自主的に」を『自主的参加』、その他の回答を『勧奨参加』とする変数として他の項目との分析を行うこととした。

### 2) 全体評価（図2、表3、表4）

総合的な評価としての『満足度』は中央値6.0、最頻値6（18名）で、中点以下である4、3の回答は15%であり、概ね満足が得られていた。

『事前の期待』は中央値5.0、最頻値5（11名）であったが、最高値7の回答も10名（24%）おり、高い期待を持った参加者が多かった。

『期待との一致』は中央値5.0、最頻値5（17名）であったが、中点4を「期待通り」とすると、5から7の「期待以上」の回答が全体の85%であった。

『満足度』と『事前の期待』『期待との一致』の相関は『期待との一致』で正の相関がみられ、 $r=0.845$ という強い相関であった。

表2 回答者の概要（N=43）

	n	%
性別		
女性	40	(93.0%)
男性	1	(2.3%)
無回答	2	(4.7%)
経験年数		
平均（標準偏差）	17.9	(8.6)
看護研究に関する役割		
研究者・研究グループ	19	(44.2%)
看護研究の教育係	14	(32.6%)
特になし	3	(7.0%)
その他	2	(4.7%)
無回答	5	(11.6%)
看護研究の経験		
あり	34	(79.1%)
今年初めて行う	4	(9.3%)
なし	1	(2.3%)
無回答	4	(9.3%)
EBPについて学んだ経験		
ある	5	(11.6%)
ない	34	(79.1%)
無回答	4	(9.3%)
看護研究について学んだ経験		
ある	33	(76.7%)
ない	6	(14.0%)
無回答	4	(9.3%)
EBPと看護研究の関連について学んだ経験		
ある	4	(9.3%)
ない	34	(79.1%)
無回答	5	(11.6%)
基礎教育		
専門学校	35	(81.4%)
大学	4	(9.3%)
短期大学	1	(2.3%)
無回答	3	(7.0%)
参加のきっかけ		
上司等の勧めで	22	(51.2%)
自主的に	17	(39.5%)
同僚に誘われて	1	(2.3%)
代行で	1	(2.3%)

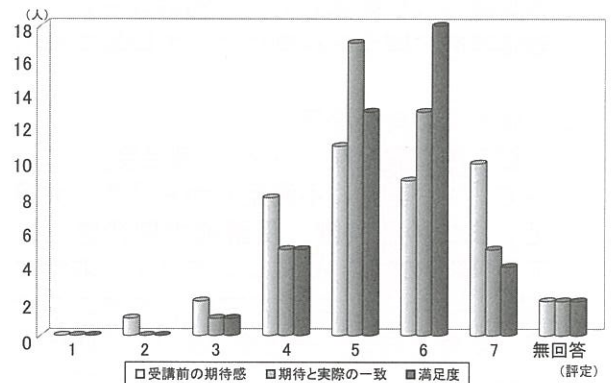


図2 全体評価

表3 全体評価およびセッションごとの評価の概要

	中央値	四分位範囲	最頻値
全体評価			
『満足度』	6.00	1.00	6
『事前の期待』	5.00	2.50	5
『期待との一致』	5.00	1.00	5
看護実践とEBP			
『期待』	6.00	1.00	6
『説明』	5.00	2.00	5
『資料』	6.00	2.25	6
『理解の深まり』	6.00	1.00	6
『受講後の関心』	5.00	1.00	5
看護研究プロセス			
『期待』	5.00	2.00	4
『説明』	6.00	3.00	7
『資料』	5.00	2.00	4
『理解の深まり』	5.00	1.50	5
『受講後の関心』	5.00	3.00	7
研究倫理			
『期待』	5.00	2.00	5
『説明』	5.00	1.00	5
『資料』	5.00	1.00	4
『理解の深まり』	5.00	1.00	5,6
『受講後の関心』	6.00	1.25	6
PC操作			
『期待』	6.00	1.25	6
『説明』	6.00	1.25	6
『資料』	6.00	2.00	6
『理解の深まり』	6.00	1.00	6
『受講後の関心』	6.00	1.25	7

表4 講習会の『満足度』と『事前の期待』『期待との一致』の相関

	『事前の期待』	『期待との一致』
『満足度』 相関係数※ (両側有意確率)	0.299 (.058)	.845 ( $p < .001$ )

※Spearmanの順位相関係数

### 3) セッションごとの評価

[看護実践とEBP] [看護研究プロセス] [研究倫理] [PC操作] それぞれの評価項目の回答の概要を表3に示す。

各セッションの総合的な評価である『受講後の関心』は、全てのセッションで中央値が5.0か6.0であり、[看護研究プロセス] [PC操作] では最頻値が7であった。『理解の深まり』も同様に中央値はいずれも5.0か6.0であった。

『期待』について、評定の midpoint 4 を「期待通り」とすると、全てのセッションの全項目で中央値は5.0か6.0で「期待以上」であったが、[看護研究プロセス] では最頻値が4「期待通り」であった。

各セッションの『受講後の関心』『理解の深まり』と『期待』『説明』『資料』との相関を表5に示す。『受講後の関心』との間に相関係数0.4以上の有意な正の相関がみられたのは、[看護実践とEBP] では『期待』『資料』、[研究倫理] では『期待』『説明』『資料』、[PC操作] では『期待』『資料』であった。『理解の深まり』との間では、[研究倫理] の『資料』以外の全てで相関係数0.4以上の有意な正の相関がみられた。

表5 セッションごと項目間の相関

	『受講後の関心』 相関係数※ (両側有意確率)	『理解の深まり』 相関係数※ (両側有意確率)
看護実践とEBP		
『期待』	.593 ( $p < .001$ )	.629 ( $p < .001$ )
『説明』	0.284 (.065)	.803 ( $p < .001$ )
『資料』	.492 (.001)	.480 (.001)
『理解の深まり』	.434 (.004)	
看護研究プロセス		
『期待』	.311 (.048)	.655 ( $p < .001$ )
『説明』	.324 (.039)	.563 ( $p < .001$ )
『資料』	0.175 (.287)	.664 ( $p < .001$ )
『理解の深まり』	.403 (.009)	
研究倫理		
『期待』	.621 ( $p < .001$ )	.632 ( $p < .001$ )
『説明』	.538 ( $p < .001$ )	.581 ( $p < .001$ )
『資料』	.408 (.008)	.312 (.045)
『理解の深まり』	.766 ( $p < .001$ )	
PC操作		
『期待』	.588 ( $p < .001$ )	.673 ( $p < .001$ )
『説明』	.324 (.036)	.518 ( $p < .001$ )
『資料』	.630 ( $p < .001$ )	.813 ( $p < .001$ )
『理解の深まり』	.614 ( $p < .001$ )	

※Spearmanの順位相関係数

### 4) 全体評価と他の評価項目との関連

講習会全体の総合的な評価である『満足度』と各セッションの総合的な評価である『受講後の関心』との相関を表6に示す。[PC操作] 以外の全てのセッションで0.3以上の有意な相関が見られた。

5) 受講コースによる評価の差 (表7)

今回の講習会は、午後はパソコンによる演習を行う【EBP演習コース】と、個別相談を含む【看護研究・研究倫理コース】に受講生が分かれた。回答者は各16名、25名であった。各セッションの項目および全体の『満足度』について2つのコースでMann-Whitney検定を行った。その結果、[看護実践とEBP]の『受講後の関心』( $p=0.030$ )、『理

解の深まり』( $p=0.038$ )でのみ有意差がみられ、【EBP演習コース】の方が評価が高かった。

6) 参加の自主性による評価の差 (表8)

参加のきっかけの自主性により【自主的参加】17名、【勸奨参加】26名の2群にわけ、各セッションの項目および全体の『満足度』についてMann-Whitney検定を行った。その

表6 講習会全体の『満足度』と各セッションの『受講後の関心』の相関

	[看護実践とEBP] 『受講後の関心』	[看護研究プロセス] 『受講後の関心』	[研究倫理] 『受講後の関心』	[PC操作] 『受講後の関心』
講習会全体に対する『満足度』 相関係数※ (両側有意確率)	.472 (.002)	.327 (.039)	.498 (.001)	0.12 (.463)

※Spearmanの順位相関係数

表7 受講コース間各セッション項目および全体評価『満足度』の差

	平均ランク		p
	EBP演習 コース (n=16)	看護研究・研究 倫理コース (n=25)	
全体評価			
『満足度』	19.91	21.70	.618
看護実践とEBP			
『受講後の関心』	25.88	17.88	.030
『理解の深まり』	25.59	18.06	.038
『期待』	23.88	19.16	.197
『説明』	24.91	18.50	.086
『資料』	23.97	18.19	.112
看護研究プロセス			
『受講後の関心』	22.83	19.10	.316
『理解の深まり』	19.53	20.29	.832
『期待』	18.30	21.06	.442
『説明』	22.36	18.68	.321
『資料』	19.69	18.63	.769
研究倫理			
『受講後の関心』	21.16	20.06	.764
『理解の深まり』	20.81	21.12	.934
『期待』	22.22	20.22	.584
『説明』	23.72	19.26	.228
『資料』	18.63	21.62	.416
PC操作			
『受講後の関心』	24.03	18.15	.098
『理解の深まり』	21.78	19.65	.545
『期待』	20.13	20.75	.860
『説明』	19.75	21.00	.725
『資料』	22.53	19.15	.340

Mann-Whitney検定

表8 自主的参加/勸奨参加間各セッション項目および全体評価『満足度』の差

	平均ランク		p
	自主的参加 (n=17)	勸奨参加 (n=26)	
全体評価			
『満足度』	25.35	17.92	.037
看護実践とEBP			
『受講後の関心』	27.00	18.73	.028
『理解の深まり』	25.88	19.46	.084
『期待』	26.88	18.81	.031
『説明』	22.97	21.37	.674
『資料』	22.88	20.56	.533
看護研究プロセス			
『受講後の関心』	25.09	19.06	.109
『理解の深まり』	20.91	21.06	.966
『期待』	21.14	20.92	.955
『説明』	20.18	21.58	.708
『資料』	19.87	20.08	.953
研究倫理			
『受講後の関心』	24.74	19.30	.144
『理解の深まり』	21.41	22.38	.796
『期待』	23.35	21.12	.547
『説明』	23.41	21.08	.536
『資料』	24.03	19.94	.276
PC操作			
『受講後の関心』	20.15	22.42	.529
『理解の深まり』	22.09	21.10	.783
『期待』	19.74	22.70	.414
『説明』	21.82	21.28	.881
『資料』	21.74	21.34	.913

Mann-Whitney検定

結果, [看護実践とEBP] の『受講後の関心』 ( $p=0.028$ ), 『期待』 ( $p=0.031$ ) で有意差が見られ, 【自主的参加】の方が評価が高かった. なお, 受講コースと自主性はFisherの直接確率法により独立性が示された. ( $p=0.518$ )

#### 7) 理解が難しかった用語

[看護実践とEBP] では10名が回答, 複数記述で「メタアナリシス」3名, 「システムティックレビュー」2名, 「データ, 情報」2名, などであった.

[看護研究プロセス] では10名が回答, 複数記述で「研究デザイン」4名, 「グラウンデッド・セオリー, エスノグラフィー」3名, 「研究のタイプ」「概念図」各2名, などであった.

[研究倫理] では3名が回答, 「準拠文書」2名, 「全体的にむずかしかった」1名であった.

[PC操作] での記述はなかった.

#### 8) その他の自由記述

全体評価として今後の実践に活かせるかについては, 「活かせると思う」36名(83.7%), 「活かせると思わない」1名であった. 「活かせると思う」についての自由記述は23名で記載され, 複数記述で, 看護研究や指導全般に関する記載が13名, パソコン操作, 文献検索に関する記載が10名, 研究倫理に関する記載が3名であった.

その他の意見では9名の記載があり, 複数記述で, 次回の開催を希望する4名, 他のスタッフにも勧めたい2名, 両方のコースを受けたかった1名, 情報保護の取り扱いに迷っている1名, 頑張っって研究していきたい1名, 指導のため自身の習熟度を高めたい1名であった.

### Ⅲ 考察

#### 1) 満足度を高めるために必要なこと

講習会の全体的な評価であり, 受講後の実践や自己学習への意欲につながる『満足度』と, 各セッションの総合的な評価である『受講後の関心』は, [看護実践とEBP] [看護研究プロセス] [研究倫理] の3つのセッションについて正の相関があった. また, 全ての

セッションにおいて『受講後の関心』と『期待(と合っていたか)』は正の相関があり, 全体的な『満足度』と『期待との一致』も強い正の相関がみられた. セッション単位でも講習会全体でも, 受講者が期待と内容が一致したと思えることが, 全体的な満足度やテーマに対する受講後の関心を高めることが示された.

受講者の期待を学習経験からみると, EBPについてはほとんどの受講者がレディネスを持っていなかったのに対し, 看護研究についてはほとんどの受講者がレディネスを持っていた. そして, [看護研究プロセス] は『期待(と合っていたか)』で, 比較的, 他のセッションより中央値・最頻値が低く四分位範囲が大きい傾向がみられ, 回答の分布が広くかつ評価が低いことを示した. 更に, 『受講後の関心』との相関も他のセッションに比べて弱かった. つまり, 今回は, 看護研究に関しては受講者のレディネスが個々に異なり, それによる期待もばらばらであり, 講習内容が期待と合っていた者, 合わなかった者が様々存在したことが推察される. 受講者がテーマについてある程度のレディネスを有する場合, 期待度からみた評定および総合的な評価にばらつきが生じ得ることが示された. 研修におけるテーマへの関心と満足度との関連については沖野ら<sup>2)</sup>も報告している. 受講者が何を期待して参加するのかを的確に知ること, 企画者・講義担当者の意図と参加者・受講者の期待がズレないように内容を吟味し, イメージしやすい具体的な事前の広報が重要である. 企画者と受講者の双方向のコミュニケーションが講習会前の早期から行われることが理想的であろう.

#### 2) 演習の方式の効果

今回, 個別相談コースとパソコンを使った演習コースに分かれたが, 【EBP演習コース】で実際にパソコンを操作しながら演習を行った受講者で [看護実践とEBP] の『受講後の関心』『理解の深まり』の評価が有意に高かった. 今回演習で行ったのは主に文献・情報検索であり, これはEBPの主要な知識・技術であるがEBPの概念の全体ではない. EBPに関しては, 講義やデモンストレーションによってもある程度の理解は得られるが,

さらに個別のパソコン演習が理解を促進し、受講者の高い評価につながることを示された。

また、パソコンを使った演習では、パソコンの利用経験などの受講者のレディネスが、講義や演習内容の理解に影響することが予測される。今回は受講者毎に異なるレディネスにきめ細かく対応できるよう補助者を配置したが、この点について、今回は詳細なデータを得ていないため、今後確認していくことが必要と考える。

### 3) ミックスセッションの効果

今回の講習会を企画するに当たり、EBP、看護研究、研究倫理、PC操作を一つの講習会の流れの中に統合した形で組み込んでいくことの是非について、企画者の間で議論と検討を重ねた。セッションが増えることにより必然的に一つ一つのセッションに時間的な制約が出てくる上、受講者が各セッションを統合し、自分なりに消化して学ぶことが出来るかということ、同様の講習会の事例がないため未知数であった。

このことについて、受講者の自由記述では、個々のセッションに対して「難しかった」といった記述はみられたが、講習会全体として不消化であったという記述は皆無であった。実践に活かしていくことについての記述内容でも、看護研究や研究者の指導に活かしていくことができる、という記述が多く、講習会全体の内容を看護研究の実践の中で応用していけるという意欲や自信として表現されていた。講習会の各セッションが、受講者の中で、身近な看護研究から、EBP・文献検索、研究倫理、PC操作と、つながり、拡がり、統合されていることが示された。

### 4) 本研究の限界と課題

講習会を評価対象とする必然として、講師やその場の状況による変数が評価に影響する可能性については完全にはコントロールできない。講習会そのものの再現可能性の限界もあり、また、対象者の人数も少ないため、本研究結果の一般化については慎重に検討を重ねる必要がある。

この点については、講習会の開催にあたり、担当者間で事前協議を繰り返し、開催の

曜日等も要望に即するものにするなどの配慮を行った。

しかし、講習会において「総合的な満足度に関連する因子は何か」、「受講者がどのような期待を持って講習会に参加するのか」、「個別な期待を講習会という場に統合するための核的要素は何か」などの観点をふまえて、会の内容吟味や確認の方法についても、明らかにしていくことが今後の課題と考える。

### 文献

- 1) 渡邊美智子, 佐藤里美, ほか: 大学病院における師長・主任を対象とした看護研究研修会の効果 実施前後の意識変化とクリティーク表からの論文評価, 日本看護学会論文集: 看護管理, 39号, 264-266, 2009.
- 2) 沖野良枝, 米田照美, ほか: 実習指導者講習会の継続・発展を目指すフォローアップ研修の効果, 人間看護学研究, 7号, 63-72, 2009.
- 3) 沖野良枝, 米田照美, ほか: 実習指導の継続・発展を目指すフォローアップ研修の試みー研修全般に関する評価の分析ー, 日本看護学会論文集: 看護教育, 39号, 89-91, 2009.
- 4) 木村恵美子: リンパ浮腫ケア研修会に関する課題 3年間にわたる開催の実践から, 日本赤十字看護学会誌, 8(1), 110-116, 2008.
- 5) 中津川順子, 中野実代子, ほか: 看護管理者の会議運営スキル向上に向けたプログラムの成果 (第二報), 日本看護学会論文集: 看護管理, 38号, 199-200, 2008.
- 6) 伊豆麻子, 三宅久枝, ほか: 小規模施設に勤務する看護者への効果的研修に関する研究 (第1報), 新潟青陵大学紀要, 8号, 51-65, 2008.
- 7) 三宅久枝, 伊豆麻子, ほか: 小規模施設に勤務する看護者への効果的研修に関する研究 (第2報), 新潟青陵大学紀要, 8号, 67-75, 2008.
- 8) 安岡高志, 峯崎俊哉, ほか: 授業アンケートにおける学生の達成感と総合評価の関係, 大学教育学会誌, 24(1), 123-126, 2002.
- 9) 宮本隆信, 刈谷三郎, ほか: 「学生による授業評価」項目試案の作成 - 高知大学における調査分析を通して -, 大学教育学会誌, 25



- (1), 102-107, 2003.
- 10) 伊藤征一：授業に対する学生の満足度の構造，星城大学経営学部研究紀要，5，97-108，2008.
- 11) 吉田誠，釜賀誠一：平成18年度後期尚絅大学・短期大学部学生による授業評価の分析

- と今後の課題，尚絅学園研究紀要．A，人文・社会科学編，2，13-25，2008.
- 12) 真田弘美，阿部俊子：EBNを实践する鍵—つくる・さがす・つかう—，日本看護研究学会誌，27(3)，52，2004.

### Abstract

The purpose of this study was to evaluate a seminar program consisting of four sessions: "nursing practice and EBP", "process of nursing research", "research ethics" and "PC skills". The participants, who were 49 nurses, selected exercises involving either PC skills or consultation about nursing research or research ethics. A questionnaire survey was then conducted after the seminar. The questionnaire recovery 43 (88%), and the answers indicated that the participants were generally satisfied with the seminar; "overall satisfaction" was significantly correlated with "nursing practice and EBP", "process of nursing research", and "research ethics". In all sessions, "interest in the theme after the seminar" was positively correlated with "expectation". The PC skills exercise group's "interest in the theme after the seminar" and "deepened understanding" scores were significantly higher than those of the consultation group for "nursing practice and EBP". The voluntary participant group's "interest in the theme after the seminar" and "expectation" scores were significantly higher than those of the passive participant group for "nursing practice and EBP". It was indicated that planning the contents of the seminar needed to match the expectations of the participants to increase their motivation, in terms of "interest in the theme after the seminar", and that PC skill exercises were effective for understanding EBP.

Keywords : EBP, nursing research, research ethics, seminar program evaluation